

「若者が考える挑戦と心構え」

都城市 前島 奈津美

私の将来の夢は、高校生に「農業の魅力」を伝えることの出来る農業の教員になることです。きっかけは、2つあります。1つ目は、家業が農家であり、幼い頃から手伝いをしていく中で「農業は楽しい」という感情が芽生えました。2つ目は、高校時代の恩師との出会いでした。恩師は農業の教員であり、日々の授業や実習の中で、農業の魅力について多く語っていただきました。私も、この恩師のような教員になりたいと強く思うようになりました。現在、南九州大学で、農業に関する専門的な知識や栽培技術、研究に熱心に取り組んでいます。

皆さんは、農業と聞いて、どのようなイメージをお持ちですか。私は、農業は一言で表すと、「大変」だと思います。ですが、一生懸命手間をかけて育てることで作物はそれに応えてくれて成長をし、やがて収穫という大きな喜びと達成感を味わうことが出来るという「魅力」があります。農業は、私達に食を提供してくれます。食は全ての基本です。同時に、食を通して作物や地域、自然環境に関心が広がるのではないのでしょうか。

近年、時代の変化によって、日本は、地方から大都市への「人の流れ」や、少子高齢化社会という問題があります。その中で、農業にも少子高齢化の波が押し寄せています。農業従事者の67%は65歳以上が占めており、39歳以下の若者はたったの7%と、構造の脆弱化が進行し深刻な問題でもあります。私は、この現状を知り「何か私に出来ることはないのか」と思うようになりました。

最近では、学校教育の一貫で、児童生徒が地域に根ざした取組を活発に行っています。この取り組みは、地域の活性化にも大きく貢献しています。そして何より、児童生徒、それぞれ自分たちが地域の良さに「気付く」ということで、郷土への愛着と誇りを持つことにも繋がるでしょう。そうすれば、地元が好き、地元で働きたいと強く思う若者が増えると思います。

その中で、2014年「まち・ひと・しごと創生本部」という組織が、日本の内閣に設置されました。地方における安定した雇用の創出や、地方への人口の流入、若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶え、時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域間の連携を推進することで、地域の活性化

とその好循環の維持の実現を目指すこととされています。これからの地方活性化には働きやすい環境の整備、Iターン・Uターン等の施策の重点化にもっと積極的に取り組むべきです。これにより、地方の農業もそうですが、地域の文化や伝統行事など様々な面でも活気が湧きますし、同時に自分たちが地域や町の良さに改めて気付くことが出来ます。良さを伝え、これからの未来に残せるように。

私は、今年の4月から、教師として教壇に立ちます。長年の夢だった教師への道を歩み始めます。教師という立場から、若者を育て、日本の農業や地域への手助けがしたい、そして、町づくりにも貢献したいと考えます。

この目まぐるしく変わっていく社会には、「気付くこと」「伝えること」そして「思いやること」、この3つが大切です。私は、それらを大切に、これからも挑戦をし続け、また、社会や政治、選挙にも積極的に参加します。